

CONTENTS

文化庁月報

1993 **9** No.300

特集●文化庁25年 文化庁創設25周年・通巻第300号記念特集号

巻頭言	文化庁創設25周年に当たって	内田弘保	4
歴代長官が振り返る文化庁の歩み	長官時代を振り返って	安嶋 彌	6
	長官時代を振り返って	犬丸 直	8
	長官時代を振り返って	佐野文一郎	10
	長官時代を振り返って	鈴木 勲	12
	鎖 帷 子	三浦朱門	14
	文化庁の二年間	大崎 仁	16
	長官時代を振り返って	植木 浩	18
	10代目の長官として	川村恒明	20
文化庁に期待すること	まず、地方劇場の水準向上を	永井多恵子	22
	お笑いで「三方良し」の国際交流を	桂 文珍	24
	新しいオペラ・ファンの育成を	錦織 健	26
年 表	文化庁25年の歩み		28

都道府県のページ

ご存じですか? こんな文化財③	
富士山・大善寺本堂	34
一度は行きたい博物館・美術館⑥	
夢二郷土美術館	37

法人紹介～文化に息吹を～

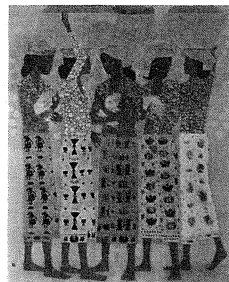
実績で著作権制度の基盤を支える	
(社)日本音楽著作権協会	40

ACA(Agency for Cultural Affairs) NEWS

第48回文化庁芸術祭協賛公演・参加公演	47
第17回全国高等学校総合文化祭開催	49
東京国立博物館本館閉館のお知らせ	45
文化財補助金交付要綱の改正等	50
●著作権法利用講座⑥	42
●文化財保護法発掘講座⑥	43
●芸術文化振興基金ニュース	52
●今月の国立劇場	55
●編集後記	56

イベント案内

第40回日本伝統工芸展／三越本店	44
第35回ブロック別民俗芸能大会	46



「娘たち」(文化庁平成2年度買上作品)

入江西一郎/作

いりえ・ゆういちろう/大正10年京都府生まれ。京都市立美術専門学校研究科卒。昭和22年より38年まで法隆寺、宇治平等院等の壁画模写に従事。38年日展初入選。以後日展を中心に活躍(特選2、白寿賞1、審査員1)。現在:日展会員、農鳥社委員。

期待すること

文化庁に

新しいオペラ・
ファンの育成を

オペラ歌手

錦 織 健

を歌えるわけではないのです。

実は、声楽家を志した人にとって、大学卒業から歌手デビューするまでの数年間というのは、最も苦しい時期なんです。仕事はもちろんないし、勉強する場もない。特に地方から上京した人にとっては、身の置場がないのです。実家からは「そんな金にもならないことは止めて早く帰ってこい」とか「東京でブラブラしないで早く嫁に行け」とか言われる。実際、音大を出てもそういったプレッシャーに耐えかねて歌手になるのを諦めてしまふ人がほとんどなんです。

では、逆にオペラ歌手になれるのはどういう人かと言うと、私のように運良く文化庁のオペラ研修所へ行かせてもらったり、在外研修員で海外留学させてもらったりした連中なんです。オペラ研修所に入ればただ同然でレッスンを受けることができますし、在外研修員になれば国費が支給されます。もちろんそのような金銭的なメリットは計り知れないのですが、もつと大きいことは、音楽を続ける大義名分が与えられるということなんです。これは意外と盲点で、「文化庁」の研修を受けていること、「文化庁」の金で外国へ行っているということ、家族や世間の理解が得られ、

私がオペラ歌手としてのキャリアをスタートしたのは五年前、文化庁在外研修員としてのミラノ留学を終えた二十八才の時です。なんとのおんびりした話かと思いかもしれませんが、実は二十代のデビューはオペラでは比較的早いスタートなのです。

もちろん、それにはそれなりの理由があるんです。オペラ歌手は、肉体的なこともあり、

音楽家の中で最もデビューが遅いと言われています。ヴァイオリンやピアノであれば十代の天才演奏家が突如世界の注目を浴びるといったことは珍しくありませんが、オペラ歌手の場合舞台上立たせてもらえるのは、三十前というのが一般的です。つまり、それだけ長い期間の訓練が必要なのです。いくら才能に恵まれていても音楽大学を出てすぐにオペラ

安心して音楽に専念できるのです。

ただ、在外研修員制度については、まだ十分な点があります。一番お願いしたいのは、帰国してからせめて半年くらいの間に、研修の成果を発表できるようなシステムを作っていただきたいということです。せっかく留学させてもらったのに、それでも音楽を止めてしまふ人が多いのは、日本に帰ってもお呼びがかからないからなんです。すごい才能を持った人はたくさんいるのに、もったいないことだと思えます。

さて、運良くオペラ歌手として仕事ができるようになってからも、なかなか歌だけでは生活は成り立ちません。そこでよく「政府が芸術家の生活を保証すべきである」という意見を言ったださる人がいます。それはそれでありがたいことなんですが、一つわかっていただきたいのは、私達として舞台人のはしくれ、観客の欲求なきパフォーマンズなど本意ではないということです。現状は確かにきびしいのですが、是非はともかく、理解はしているのです。

でも、オペラ歌手として生きていくからには一人でも多くの人にオペラを聞いてほしいと思うのは、当然のことです。そこで文化庁にお願いしたいのは、大きな公演に対する助

成もさることながら、聴衆を育てることに力を注いでほしいということです。

僕は移動芸術祭の公演で「メリー・ウィドウ」のカミーユ役でオペラ歌手としてのデビューを果たしました。あの公演に来て下さるのは今までオペラを見たことのない人達ばかりですから、最初は何か変わったお芝居だなといった感じで観ておられる。でも、だんだんと舞台上で起きていることに引き寄せられ、ジョークに大笑いしたり美しいアリアに盛んに拍手してくれたりするようになるんです。オペラのような舞台芸術では、聴衆は出演者と同じ空間で笑い、怒り、泣くことができます。そんなテレビや映画やビデオからは味わえない魅力があるのです。その楽しみをもっと多くの人々が知れば、それをきっかけにして普段僕たちがやっているオペラ公演にも徐々に足を運んで下さるようになるのではな

いかと思うのです。

ですから、移動芸術祭や青少年芸術劇場のようなオペラの入門編というべき事業は、地方だけでなく東京でも実施すべきです。オペラ愛好家と称する一部の人達の間では、日本人が日本語で歌うオペラなど「本物」ではないと考えられています。僕達だって「本物」のオペラをやっているなんてちっとも思っていない。オリジナルのメロディに日本語がうまく乗っかるわけがないですから。僕達がやっているのは、二十世紀の日本に生まれた新しいジャンルのパフォーマンズだと思っています。その意味では、日本人の脚本家・作曲家の手になる創作オペラにも力を入れたいたのですが、自称オペラ・ファンのそのような試みに対する反応が実に冷たいのも残念なことです。

第二国立劇場(仮称)ができたなら我が国における現代舞台芸術の殿堂になるそうですが、二国ではオペラ界の頂点に立つ公演だけでなく、新しいオペラと新しいオペラ・ファンを生み出す事業も積極的に行ってほしい。それこそ我が国でオペラがもつ身近な芸術になる近道ではないかと思うのですが。

(本稿はインタビューの上、編集部でまとめたものです。)

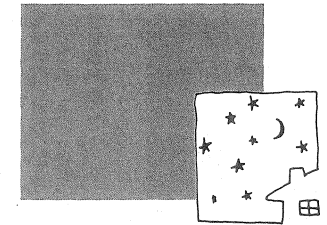


9月文化庁行事予定

- 9日・院展授賞式（上野精養軒）
- 10日・芸術祭執行委員会（第2回）総会（尚友会館）
 - ・文化財保護審議会（文化庁）
- 12日・「日本とヨーロッパ：1543～1929」展オープニング（東ベルリン国立オペラ劇場）
- 17日・芸術祭国際公演歓迎レセプション（ダイヤモンドホテル）
- 18日・芸術祭国際公演（国立劇場）
- 21日・都道府県・指定都市文化行政主管部課長会議（都道府県会館）
 - ・都道府県・指定都市文化行政主管部課長会議懇談会（都道府県会館）
 - ・第40回日本伝統工芸展授賞式（日本橋三越本店）
 - ・第40回日本伝統工芸展レセプション（日本橋三越本店）

〇お詫び

8月号のACA NEWS「民間芸術等振興費補助金の交付状況」の内容に誤りがありました。「芸術の国際交流促進事業のうち「日本・マレーシア青少年ジョイントコンサート実行委員会」への補助金額は千五百万円ではなく百五十万円です。お詫びして訂正いたします。



文化庁月報 9月号(通巻300号)

平成5年9月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行—株式会社きょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7-4-12

電話03(3571)2126 (代表)

営業所 〒162 東京都新宿区西五軒町4-2

電話03(3268)2141

振替口座 東京9-161番

印刷所—(株)行政学会印刷所

定価500円（本体485円）送料51円

年間購読料6000円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込み下さい。

広告の問い合わせ・申し込み先

(株)きょうせい営業第一課宣伝係

電話03(3269)4145 (ダイヤルイン)

©1993 Printed in Japan

ISSN 0916-9849

編集後記

25という数字は、欧米では100の四分の一に当たること
で、20や30よりも大切な節目と考えられているようです。我が
国でも「四半世紀」という表現があるにはありますが、あまり
定着していません。百周年、五十周年が盛大に取り扱われるの
は当然として、やはり日本では十年単位で記念する場合が多い
ように思われます。「十年一昔」という言葉にもあるように、十
年が切りがいいというだけでなく、一時代ぐらゐの意味を持っ
た大きな区切りとして考えられているせいかも知れません。
他方、「国家百年の計」とも言われます。文化庁も含め政府の
仕事というのは全てこのような性格を有していると言えませんが、
日常勤務の中でいつもこの言葉を意識するというものなかなか
難しいものです。そこで、と言うのも少々強引な話ですが、我々
も創設二十五周年を契機として文化庁の百年の計に改めて思い
を致しながら、文化行政の発展に努めていきたいと思ひます。
今後ともよろしくお願いします。

(K)